

## 現代方言に残存する《醒世姻緣傳》中の語彙（5）

植 田 均  
UEDA, Hitoshi

### 〔提要〕

西周生著《醒世姻緣傳》成書于明末清初，是用當時的北方官話來寫成的。它又是方言詞匯很豐富的一本小說。這些方言詞匯，有的現在已消失，有的至今仍使用。本文試圖哪些詞在現代方言里繼承下來。

1. 前言
  2. 本稿で取り扱う範囲と基本資料
- 凡例
- 語彙索引
- |            |         |
|------------|---------|
| A～G        | (以上、別稿) |
| H、J (上) の部 | (本稿)    |
| J (下) ～の部  | (以下、別稿) |

## H

### 還許 háixǔ (許)

釈義：「もしかして、もしかすれば（…かもしれない）。現代共通語では一般に“或許；也許；可能；恐怕”。

太田辰夫 1988 は『兒女英雄傳』に出現する“還許”“也許”の項で「“許”だけでも推測の意を表すが、これに副詞“還”“也”がついたもの」(p.337) とする。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも“還許”は未収。《拼音詞匯》にも未収。

方言辭典類では《山東》に“還許”を収める。《北京話》、《現代北京》、《漢方常》、《河北方言》、《吳》に未収。

《漢方大》に“還許”の方言点を東北官話（東北）、冀魯官話（山東省淄博）、中原官話（山西省臨猗）、晋語（山西省静楽、柳林）とし、《醒》第五十四回より挙例する。

近世語辞典類では《考论》に“还许”を収録。《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。下記の“還許有…”を黄肅秋校注本では“还有许…”の語序にする。

又叫春鶯説：“你去尋尋，還有許他二爺小時家穿的褲子合布衫子，尋件給他換上。”(57.9a.9)  
 (また、春鶯を呼んで「お前、ちょっと探しておいで。ひょっとしたら、うちの子の小さい頃身につけていたズボンと綿のシャツがあるかもしれないから着換えさせておやり」と言いました)

## 海青 hǎiqīng

積義：「袖が広い旧式の中国服」。現代共通語では一般“一种袖子宽大的长袍”。

《现汉》、《补》に未収。《古今》に書面語語彙、《汉语》に吳方言語彙として収録。現代共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》未収。

方言辞典類では《汉方常》に吳方言とし、鄭明選《秕言》より“吳中方言称衣之广袖者谓之海青”を引用する。《吳》にも同様に収録。北方方言系の辞典類《山东》、《北京话》、《现代北京》に未収。

《汉方大》にも方言点を呉語（上海市、松江。江蘇省蘇州、常熟）とする。

近世語辞典類では《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“宽袖的袍子”とする。

次早回到家中，走進房去，好好的還穿了新海青、新鞋、新帽，不是昨夜成親的那个新郎。  
 (28.3a.7)

(翌朝、家へ戻り部屋へ入ると、新しい袖の広い中国服、新しい靴、新しい帽子をきちんと身につけていて、昨夜結婚したかの新郎とは異なる)

## 害 hài

積義：「(病気に) かかる」。現代共通語では一般に“患”。

《现汉》、《古今》、《汉语》に一般語語彙として収録。《补》に未収。

方言辞典類では《山东》に収録。《汉方常》に“害”一字だけでは未収。《现代北京》に未収。

“害”は北方方言である。それは《汉方词》の詞目“生病”項を見ても明らかである。“生病”項で“害病”を指す方言点は官話の西安、武漢、成都、合肥、揚州であり、南方諸方言に見られない。湘語、贛語にも見られない。

《汉方大》に“害”一字だけでは“患”の積義は未収。

近世語辞典類では《百部小说》、《例释》に“害”を積義“生病”で収録。《方言俗语》、《古方言》にこの意味では未収。

《醒》の例。

新近往通州去看他，送了他大大的二兩銀，留喫了一頓飯，打發的來了，惱的在家害不好哩。  
 (9.11a.6)

(最近、通州へ奴に会いに行ったが、二両の銀子を渡し、一度食事の席を設け、それだけで追っ払ったのさ。その結果、癩癩を起こし、家で病気になったのだよ)

一位孟參政的夫人害了个奇病，但是耳内聽見打銀打鉄聲，及聽有“徐”字，即舉身戰慄，幾至于死。(27.3a.5)

(孟參政夫人はある奇病にかかった。耳の中で銀細工や鍛冶屋の鉄を打つ音がし、「徐」の音を聞くと体が震え、死に至ってしまいそうになるのです)

問素姐道：“姐姐是因怎的就害起病來。”(63.8b.10)

(素姐に「姉さんはどうして病気になったの?」と尋ねます)

“害”は別に「殺める」の意義を有す。その例。

這是忘八淫婦不知定下了甚麼計策，哄我前去，要算計畫我。(2.6a.2)

(これは恥知らずのすべたが何やら策を弄し私を騙して表へ行かせ殺そうって魂胆だろう)

なお、《方言俗語》に“害”の別の積義を“嫌”とし、“魯西方言‘嫌’白读音如‘害’。‘害热’、‘害疼’、‘害饿的慌’，就是嫌热、嫌疼、嫌饿的慌”(熱がる、痛がる、とてもひもじい)とする。この“害”“嫌”は共通語では“发”である。例えば“发胖”(太ってくる)など。《汉方大》に“害”一字の意義項に“发”は未収であるが、語彙項“害冷”を積義“发冷”(寒く感じる)で方言点を冀魯官話(山東省済南)、膠遼官話(山東省青島)、中原官話(陝西省西安。山東省費県)、晋語(河南省輝県)とする。

### 汗病 hànbing

積義：「発熱を伴う病気」。現代共通語では一般に“伤寒(病)”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言として《魯西方言词汇(续)》、《太原方言词汇》に見えるところだけで地域特定をしていない。《山东》にも収録する。《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話(山東省聊城)、中原官話(山東省平邑)、晋語(山西省太原、必県)とする。

近世語辞典類では《古方言》に“旧时称瘟病”(急性伝染病)とする。《例释》、《方言俗語》に未収。

《醒》の例。

你害汗病，汗驚的胡說了。你搗的是那哩鬼話。(49.11b.5) (“哩” = “裏”)

(お前が熱病だって、うそ言え！お前は何をたくらんでいるんだ?)

我只說你爺們搥折踝子骨，害汗病都死在京裏了。(85.7a.2)

(私は、お前の旦那様がくるぶしの骨を折り熱病にかかり京くみやこで死んじゃったと思ったのよ！)

### 汗巾 hànjin

積義：「装飾用の紐、装飾のついた長い布」。現代共通語では一般に“长巾”。

《现汉》、《补》に未収。《古今》に積義“①[一般語語彙]擦汗用的毛巾。②[方言語彙]系腰用的长

巾”とする。《汉语》は軽声語、儿化語“汗巾儿”で釈義が“系腰用之长巾”のひとつのみである。軽声語且つ儿化語は北方語の証しである。《拼音词汇》、《常》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》に未収。《河北方言》の詞目“毛巾”（釈義「タオル、手ぬぐい」）頃に“汗巾子”を収録するが、“汗巾儿”未収。《博山方言研究》の分類詞表「衣服、穿戴」項に“小布”（釈義“手帕”）の次に“汗巾”“围巾”を排列しているが、“汗巾”の釈義は不明。

《汉方大》に“汗巾”（釈義“手帕；手绢”）を方言点を西南官話（雲南省永勝、大理。貴州省黎平）、吳語（浙江省泰順）、湘語（湖南省隆回）、閩語（福建省福州、閩侯洋里、福清莆田）とする。また、“汗巾子”（釈義“①绣花手绢，或用于装饰，或用于拭汗。②裤腰带”）で①の方言点を中原官話（山西省稷山、新絳）、②の方言点を吳語とする。なお、《汉方大》に“汗巾儿”は未収。

《汉方词》の詞目“手绢”項に“汗巾”を指す方言点は閩語の福州である。これは北方語の軽声語“汗巾（儿）”（釈義“长巾”）とは異なる。腰に着ける釈義“裤腰带”に限らず、「長い布」とすれば北方語と考えられる。

近世語辞典類では《方言俗语》に単なる「タオル」「ハンカチ」ではないと読みとれる。そこには“汗巾儿”で釈義“女子常用的装饰物。上线挑的花纹图案，四边坠有穗子、小铜铃。也可拭汗或搭头。又作汗巾子。今山西稷山话仍有此语<见陈庆延《山西稷山话所见元明白话词汇选释》，载《语言学论丛》第七辑，商务印书馆，1981>”とする。

《醒》の例。次の例は銀子の中へ入れているゆえ、「長い布」であり「紐」ではない。

縣公道：“你汗巾上包這十兩銀子的縲痕在那裡。”（23.13a.6）

（県知事は「お前の長布にこの十両の銀子を包んだ痕跡はどこにあるのだ？」と申します）

近世語では“汗巾”に接尾辞“儿”または“子”が付接することも多かった（《金瓶梅词典》、《红楼梦语言词典》など）。

接尾辞“兒”が付接する例。“白綾汗巾”と“這個汗巾兒”は同一のものである。やはり、「耳飾り、指輪」の中に入れてあるゆえ、単なる「紐」ではない。

童奶奶從袖中取出一个月白綾汗巾，…說道：“這個汗巾兒裏邊有付小金丁香兒，兩個銀戒指，煩爺替我稍給奶奶，也見我感激爺的意思。”（71.2b.9）（“稍”＝“捎”）

（童奥さんは袖の中から淡い青色の綾子長布包みを取り出して…「この長布の中には一對の小さな金の耳飾り、二つの指輪があるわ。どうぞ奥様にあげて下さい。私の感謝の気持ちですわ」と申します）

接尾辞“子”が付接する例。

狄希陳說道：“這是娘的汗巾子，等尋着了我的，還要換回去哩，…”（52.2a.7）

（狄希陳は「これはお母さんの長布だよ。僕のが見つければ交換するんだ。…」と言った）

侯、張…説：“來的路遠，可是沒稍一點甚麼來送給狄老爹，叫你送這們些盤纏，又送了尺頭、汗巾子，可是消受不起。…”（96.9a.3）（“稍”＝“捎”）

（侯、張…は「遠路やって参りましたが、何も狄旦那様にお持ちしませんでした。それなのに、こんなにも旅費を下さり、更に反物や長布までも。本当に勿体ないことでございます。…」と言った）

これらの文の少し前に“汗巾”を用いた文があり、“汗巾子”とは同じ内容を示しているのがわかる。その第五十二回と九十六回の例。

素姐接到手内，把汗巾展開，將那金桃牙也拿在手内看了看。…。狄希陳回說：“這是僭娘的汗巾，…” (52.1b.9)

(素姐は手に取って長布を広げ金の楊枝を手の中に乗せ見た。…。狄希陳は「これはお母さんの長布だよ」と言った)

素姐又看那汗巾，說道：“這汗巾，我却沒說，是他分外的人事。…” (96.8a.10)

(素姐はその長布を見て「この長布は、私言わなかったのに。あいつの殊の外の心遣いなだね。」と言った)

### 漢子 hànzi

積義：「夫」。現代共通語では一般に“丈夫”。

《現漢》、《古今》に方言語彙として、《汉语》に一般語語彙（但し、俗称）で収録。《拼音词汇》に収めるのは積義「男子、男性」のものであろう。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言として丁玲《延安集》、蒲松齡《聊齋俚曲集》より挙例。《山东》にも収録する。《河北方言》も「夫」と積義するのは張家口、承德地区で、“不尊重的称呼”として唐山地区、“互戏称”として邯鄲地区を挙げる。《現代北京》に未収。

《汉方大》に積義“丈夫”で方言点は東北官話、冀魯官話、膠遼官話、中原官話、晋語、蘭銀官話、西南官話とする。

《汉方词》の詞目“丈夫”の項で“汉子”を指す方言点は無い。

近世語辞典類では《例釋》に収録。《方言俗語》は《金瓶梅》等からも挙例し、“今银川方言仍称丈夫为汉子” (p.181) とする。

《醒》の例。

晁無晏老婆要到外邊去合他漢子說話。(21.12b.2)

(晁無晏のかみさんは、外へ行って夫と話をしようとしています)

素姐說：“俺漢子合兩個兄弟都死了，你也不看我去。我自己來，你還推知不道，特故問我哩。” (74.12b.2) (“巳” = “己”)

(素姐は「私の旦那と二人の弟がともに死んだのよ。あんたが私に会いに来てくれないので自ら来たのよ。なのに、あんたはまだしらばっくれてわざと尋ねてからに」と言った)

### 夯杭子 hānghángzi (杭杭子；行行子；杭子；行子)

積義：「嫌われている人、たいしたものでない物」。現代共通語では一般に“不喜欢的人或东西”。規範化辞典類には一般に“行行子；行子”と作る。

《現漢》、《古今》に“行子”と作り方言語彙として、《汉语》に“行子”で一般語語彙として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》に“行子”を<方>符号を付して収める。

方言辞典類では《汉方常》に“行子”と作り北方方言で《红楼梦》、魯易等《团结立功》より挙例。

また、“行行子”を北方方言とし《儿女英雄传》、艾蕪《山雨》より挙例。《山东》は“行子；行行子”、《现代北京》は“行子”で収録。《吴》に未収。

《汉方大》は“夯杭子”（釈義“东西”。含軽蔑意）の方言点を冀魯官話（山東省）とし、《醒》第七十一回より挙例。また、“行子”（釈義“不喜爱的人或东西”）の方言点を北京官話（北京市）、冀魯官話（山東省博平、聊城、東阿）とする。なお、“夯杭子；杭子；杭杭子”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に“行子”を《聊齋俚曲集》、《儿女英雄传》より、“杭杭子”“夯杭子”を《醒》より、“行行子”を《儿女英雄传》より各々挙例。《古方言》に“行子”（黄儿；行货子；行行子；杭子；杭杭子；黄子）を釈義“称不受喜爱的人或东西。犹家伙或东西”で収録。

《醒》では“夯杭子；杭杭子；杭子”と作る。黄肅秋校注に釈義“笨货、傻东西”とする。先ず、“夯杭子”の例。

傻孫。買這夯杭子做什麼。留着這幾錢銀子，年下買瓜子嘍也是好的，…。(6.12a.4)

(ばかね！こんなもの買ってどうするの？そのお金を残しておいて、お正月にウリのタネを買って囓る方がましだわ。…)

これは「物」を指す。

次は“杭杭子”の例。

任直道：“你這三個杭杭子也不是人。”武義道：“是人，肯揷住人的文書麼。我把這扯淡的媽來使驢子合。”(22.16b.7)

(任直は「お前ら三人とも人でなしだ！」と言うと、武義は「それが人でさあ。人の文書を抑えて持っていていいのかい？わしはこのつべこべ言う奴らをロバとやらしてやらあ」と言いました)

見世報。杭杭子的腔兒。您怕這一百兩銀子扎手麼。(15.6a.5)

(ばかだな！愚か者の言いぐさだ！お前達は百両の銀子に困惑しているのか？)

これらは「人」を指す。

次は「物」の“杭杭子”の例。

覓漢道：“要不將銀子去，員外坐我的工食哩。我要這窮嫌富不要的杭杭子做甚麼。”(67.9a.2)

(作男は「もし銀子を持ち帰らなかったら員外様はワシの手当てを差し引くんですよ。こんな代物、貧乏人には高嶺の花で、金持ちには値打ちがない。そんなものをもらって何になるんですか？」と言った)

你光要汗巾，不要這杭杭子。你倒好性兒。(75.10a.4)

(キミは長布が欲しいだけで、そのやくざなものはいらんっていうの？本当にいい性格しているね)

次は“杭子”の例。これは「人」を指している。

叫俺舅自己買罷；我這不長進的杭子，只怕拐了銀子走了。(39.15a.3) (“巳” = “己”)

(あんたの弟さん自身で買ってもらおう。俺はこのような不甲斐ないでくの棒だから、銀子を持ち逃げするかもしれないから)

## 行…行… háng…háng… (抗…抗…)

積義:「時には…し、時には…する」。現代共通語では一般に“有时…有时…; 一边…一边…”。

《説文》に“行:人之步趨也。從彳,從亍。凡行之屬皆從行。戸庚切”とする。

《廣韻》下平十一唐韻に“行:伍也。列也。戸更,戸浪,戸孟三切”とする。また、去声四十三映韻に“行:景迹又事也。言也。下更切,又胡郎、胡浪、胡庚三切”とする。“行…行…” (= “一边…一边…”) は《廣韻》の“伍也。列也。”より出たものと思われる。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に“行…行…”は無い。

方言辞典類では《山东》、《徐州方言志》に“行”だけで“偶尔;有时”と積義する。特に、《徐州方言志》は“行”の用例で“行…行…”の構造形式のみを掲げる。《汉方常》、《北京话》、《现代北京》に未収。

《汉方大》は“行…”(積義[副詞]“有时;时而”)で方言点を中原官話(江蘇省徐州)とする。ただ、用例は全て“行…行…”の形をとる。

近世語辞典類では《考論》に収録。何金松《虚词历时词典》に“行…行…” (= “一边…一边…”)の用例を元・呉弘道《[中吕]上小楼・題小卿双渐》、元・王伯成《[般涉调]哨遍・项羽自刎》より挙例。また、“行…行…”と同義の“一行…一行…”を《古今小说・张古老种瓜娶文女》、《红楼梦》第二十九回より挙例。

一方、《例释》、《百部小说》等は“杭…杭…” (= “行…行…”)と捉えないで“杭好杭歹”(積義「時にはよく時には悪い」)の固定した四文字で熟語の如く考えているのではないか(しかし、実際には《醒》からの“行説行勸”の如く、様々な組み合わせがあり、“杭好杭歹”に固定していないのである)。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

衆人行説行勸,扶素姐歸了臥房,撥了兩個家媳婦伺候看守。(77.14a.6)

(みんなは言いながらなだめ、素姐を支えながら寢室へ帰らせ、二人の使用人のかみさんを選んで世話をして貰いました)

次は“杭…杭…”の例。黄肅秋注に“杭好杭歹”を積義“时好时坏”とする。

你別要這只管の不足,那内官的性兒是拿不定的,杭好杭歹,他恨你咬的牙頂兒疼。(71.1b.2)

(あんたは不足ばかり言いなさんな。宦官の気性がつかめていないわ。良かったり悪かったりでよく変わるのよ。あの人はあんたを恨んで歯をギリギリいわせていたんだよ)

## 嚎喪 háosang (又) háosāng

積義:「泣きわめく」。現代共通語では一般に“大声哭叫”。これは単なる“哭”(泣く)ではない。

現代語では一般に“号喪”と作る。《現漢》、《古今》に“号喪”と作り方言語彙として、《汉语》も“号喪”で一般語語彙として収録。《拼音词汇》に軽声語“号喪”[háosang]を“哭”と注記し、<方>符号を付して収める。また、非軽声語“号喪”[háosāng]の積義を“哭喪”と注記し、別に収める。

方言辞典類では《汉方常》に“嚎喪”と作り北方方言として《红楼梦》、《老舍文集》より挙例。

また、“号喪”と作り北方方言とし、向大《青芦河畔歼匪记》より挙例。《山东》、《北京话》、《现代北京》にも収録。《河北方言》の詞目“大声哭”項に“嚎桑”を、また、詞目“喊嗓子”(=大声嚷)項に“嚎桑”を、そして、詞目“哭”項に“嚎喪”(贬词, 骂人语)及び“号喪”(贬词)を収録。《吴》に未収。

《汉方大》の“嚎喪”(积義“大哭”〈厌称〉)は北京官話(北京市)、西南官話(四川省成都。雲南省永勝)とする。

近世語辞典類では《例释》、《百部小说》、《古方言》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

各人忙亂正經的事,憑那龍氏數黃道黑的嚎喪。(60.7a.9)

(各々の人はまっとうな事に忙しくしています。従って、龍氏が口から出任せを言って泣きわいても好き勝ってにさせておいた)

素姐吆喝道：“待怎麼呀。沒要緊的嚎喪。等他兩個砍頭的死了可再哭,遲了甚麼。”(74.5b.7)

(素姐は「どういうつもりなの?そんなにわめきたてちゃってさ!あの二人のばかたれが死んでから泣きなさいよ。それでも何が遅いっていうの?」とわめきたてた)

## 好生 hǎoshēng

积義:「①とても。②よく、十分に」。現代共通語では一般に“①很。②好好儿地”。

《现汉》に上記の二つの积義を方言語彙とするが、《古今》は前記积義①を近世語語彙として、②を方言語彙とする如く、分けて収録。《汉语》に①を《元曲選》より、②を《紅樓夢》より挙例、両者を一般語語彙とする。《拼音词汇》に[副詞]と注記して収録。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言、贛方言とする。《现代北京》は前記积義②を収める。《吴》に未収。

《汉方词》の詞目“很”の項で“好生”を指す方言点は無い。

《汉方大》に积義②“好好儿(地)”で方言点を東北官話、北京官話、冀魯官話、中原官話、江淮官話、西南官話、湘語、贛語とする。北方から下江までの官話及び湘、贛方言であるが、呉語、客家話、粵語、閩語等の南方諸方言には見られない。なお、积義①は未収。

近世語辞典類では《方言俗语》に《金瓶梅》、《三遂平妖传》より挙例し、“今四川话仍有此语。徐州话‘好生’音转为 hǎoshāng”という。《例释》は“好生着”で収め、积義“好好儿的”で《聊斋俚曲集》より挙例。

《醒》からの前記积義①の例。

晁源甚是乖張,晁老又絕不救正,好生難過。(16.8b.10)

(晁源はとても人情にもとる奴で、父親の晁老はそういう息子を改められず、とても困っています)

梁、胡二人見晁老父子俱在面前,這包銀子好生難處,又不好說夫人已經賠過,……。 (17.13b.6)

(梁、胡の二人は晁親子が共に面前にいたので、その包みの銀子の処置にとっても困った。また、夫人が既に償って返してくれたとも言えなくて、…。)



薛教授夫妻娶了連氏過來，叫自己的女兒素姐形容的甚是賢惠，已是喜不自勝；今又得巧姐恁般賢淑，好生快樂。(59.9b.4) (“巳” = “己”)

(薛教授夫妻は連氏を娶り、自分のむすめ素姐よりもとても賢淑だったので、嬉しさを抑えきれない。そして、今また、巧姐のような良妻賢母を得てとても幸せです)

前記積義②の例。

陳公叫人把艾虎合八哥用心收着，讓童奶奶到炕房暖和，好生待飯；…。(71.9a.7)

(陳公は人に艾虎と九官鳥を注意深くしまわせ、童奥さんにオンドルのある寢室へ行って暖をとって貰い、きちんとご飯でもてなした。…。)

又分付別的囚婦，教他們：“好生服事，不許放肆。…”。(14.7a.1)

(また別の女囚に言いつけた：「よくよく世話をするんだ。好き勝手な事は許さんぞ。…。」)

### 合氣 héqì (格氣)

積義：「けんかをする。むかつ腹を立てる」。現代共通語では一般に“愠気；生气；斗気”。

《現漢》、《補》に未収。《古今》に近世語語彙として収録。《汉语》に一般語語彙として《醒》より挙例。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《河北方言》に“合气”は未収。但し、詞目“生气”項に同音語“阁气”を有す。《汉方常》、《山东》、《北京话》、《现代北京》に未収。

《汉方词》の詞目“生气”項で“合气”を指す方言点は無い。

《汉方大》に“合气”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)、中原官話(山西省南部)、吳語(上海市崇明県)とする。

近世語辞典類では《例释》に“合气”[héqì] (gěqì) とし、《真本金瓶梅》、《聊斋俚曲集》、《醒》より挙例。《方言俗语》は“即‘格气’”とし、《金瓶梅》の他に、《金线池》、《醒》、《石点头》より挙例。そして、“魯南、苏北皆有此语”(p.251)とする。《古方言》に“合气”(阁气；咯气)を収録。

《醒》の例。

魏三説：“小的料得後來要合氣，所以留着原銀，好為憑據。”(47.9a.3)

(魏三は「私は後々揉めるだろうと思い、元の銀子を残し置き証拠としたのです」と言った)

只有龍氏曉曉的說道：“他小兩口合氣，你老人家原不該管他。…”。(63.6b.6)

(ただ龍氏のみしつこく「彼ら若夫婦が揉めているのだから、あなた様のようなご老体が構うべきではないのです。…」と云った)

呂祥道：“…，我又跟着奶奶赶了去，奶奶合爺合起氣來，爺不敢尋奶奶，只尋起我來，我可怎麼禁的。”(86.5a.8)

(呂祥は「…。更に、私が奥様について行きますとね、奥様が旦那様と揉めたら、旦那様は奥様の方に向かわなくて私の方に向かって来ます。その場合、私はどうしてくい止められましようか?」と云った)

**喝掇 hēduō (喝奪)**

積義：「叱責する。叱る、大声で人を責める」。現代共通語では一般に“训斥；吆喝”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《北京話》、《現代北京》に未収。

近世語辞典類では《例釋》に“今方言中说‘喝叭’。‘喝’音豁”(p.192)とする。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

兩邊的皂隸一頓喝掇了出去。(74.10a.9)

(両側の下級役人は、ひとしきり怒鳴りつけて出て行きました)

一个又是捋頭，兩句喝掇，只好伍着眼，別處流淚罷了。(95.7b.1)

(もう一人はばか者だから、少し叱りつけると仕方なく眼を覆い、別の所で涙を流すだけだわさ)

我只待喝奪奪下他的，我惱那伍濃昏君沒點剛性兒，賭氣的教他拿了去。(96.11a.1)

(私はあいつらから叱り奪い返そうとしたわ。でも、わたしは軟弱でばか君主が少しの気骨もないので怒っているのよ。意地で奴らにくれてやったわ)

**恨人 hèn rén**

積義：「人を怒らせる」。現代共通語では一般に“使人生气”。

《現漢》、《古今》に方言語彙として、《漢語》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に東北方言として林子等《咆哮的松花江》より举例。《山東》(積義“令人惱火、生气”)、《簡明東北方言词典》にも収録。このように、“恨人”を一語とみなす。《北京話》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》に“恨人”を立項せず。単音節語“恨”の積義“使人生恨”で方言点を東北官話(東北)、北京官話(北京市)、西南官話(湖北省武漢)とする。そして、用例“这孩子多恨人!”“这事多恨人”の如く“人”との共起を挙げる。これは“恨”と“人”とを分けて考えているからである。

近世語辞典類では《方言俗語》、《例釋》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

因小隨童回去對着他洩了機關，所以叫他來作踐了這們一頓，溯本窮源，別人可怨，這小隨童恨人。(78.13a.7)

(小わっぱが帰って彼女に漏らしたのです。だから、彼女は痛めつけてやろうとやって来たのですよ。もとを正せばあいつです。他の人は許せてもこの小わっぱだけは恨むべき奴です!)

**紅馥馥 hóngfùfù**

積義：「赤い」。褒義である。現代共通語では一般に“红扑扑”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《現代北京》、《河北方言》に未収。《山東》に同音語“红肤肤”として

立項。

《汉方大》に同音語“紅拂拂”で方言点を冀魯官話（山東省淄博）、晋語（山西省忻州）とする。近世語辞典類では《百部小説》、《例釋》に収録。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

直待了晌午大轉，相棟宇喫的臉紅馥馥的從外來了，見了老狄婆子，…。(58.2a.9)

(お昼を大きく過ぎて相棟宇が酒を飲んで赤い顔をしながら外からやって来ました。狄奥さんに会い、…)

三日以後，沿邊漸漸的生出新肉，紅馥馥的就如石榴子兒一般。(67.10a.5)

(三日後、周囲に徐々に新しい肉ができ、赤くてザクロのようでした)

### 猴 hóu

積義：「(サルがしゃがみこむような恰好で)しゃがむ」。現代共通語では一般に“(象猴子似地)蹲着”。

《現漢》に方言語彙として、《古今》、《漢語》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に北方方言として沈凱《古瑪河春曉》より挙例。《山東》、《北京話》、《現代北京》、《河北方言》にこの意味では未収。

《漢方大》に積義“蹲”で方言点を中原官話（山西省新絳、臨猗）、江淮官話（安徽省巢湖）、西南官話（湖北省武漢）、湘語（湖南省）とし、《紅樓夢》等より挙例。

《漢方詞》の詞目“蹲”項で“猴”を指す方言点は無い。

近世語辞典類では《百部小説》に積義“①依偎；纠缠不放。②缩着身子呆（在某地）。多指动作不潇洒，不大方”とする。《方言俗語》、《例釋》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

這燒香，一為積福，一為看景逍遙，要死拍拍猴着頂轎，那就俗殺人罷了，都騎的通是騾馬。(68.17a.7)

(このお参りは、一つは積徳、もう一つは景色を見て自由気の向くままの見物とすることです。かごの中で息が詰まるようにしゃがんでりゃ、全然面白くないですよ。皆ロバやウマに乗って行かれます)

### 後日 hòurì

積義：「あさって」。現代共通語では一般に“后天”。

《現漢》、《古今》に未収。《漢語》、《補》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》、《常》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に《吳》、《南昌方言词汇》、《湖南省耒陽方言記略》、《廣州話方言詞典》、《普通話閩南方言詞典》に見えろとし、地域特定はしていない。そして、《魯彥選集》より挙例。《寧波方言詞典》にも収録。《山東》、《北京話》、《現代北京》に未収。

《漢方大》に方言点を冀魯官話、膠遼官話、中原官話、晋語、西南官話、単なる官話、呉語、湘語、贛語、客話、粵語、閩語、郷話とする。きわめて広範囲に渡り分布している。

《汉方词》の詞目“后天”項で“后日”を指す方言点は、官話の太原・武漢、呉語の蘇州・温州、湘語の長沙・双峰、贛語の南昌、客家話の梅県、粵語の広州・陽江、閩語の厦門・潮州・福州・建甌である（官話の太原、武漢は“后天”も同時に使用）。

近世語辞典類では《例释》に《水浒》、《真本金瓶梅》、《醒》より挙例。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

又合小和尚説：“你明日多睡造子起來，你可在家裏歇息一日，後日往書房去罷。”（30.12a.3）  
（また、小和尚に「あんたは明日よく眠ってから起きればいい。家で一日休み、あさってに私塾へ行けばいいよ」と言いました）

珍哥説：“他就這們聽奶奶説。奶奶就每日的跟着他哩。你替我上覆奶奶：你說我只沒的甚麼補報奶奶，明日不發解，後日準起解呀，要是審録打不殺回來，…”（51.12a.3）

（珍哥は「あいつはそんなにお母様のいう事を聞くの？お母様は毎日あいつの後について行って見張っているの？あんたは代わりにお母様に言ってほしいわ。私は別に何らお母様に恩返しできていません。明日護送されなければ、あさって必ずされるわ。もし、取り調べで、ぶち殺されずに戻って来れたら、…」と言った）

明日遞了訴狀，後日准出來，大後日出票，俗次日就合他見，…。（81.9b.10）

（明日訴状を提出すれば、あさってには必ず受理され、しあさってには召喚状が出され、その次の日には奴にお目にかかれます。…。）

但し、《醒》の“後日”の積義は多く“以后”（後日）であり、“后天”（あさって）の意味ではない。

## 後晌 hòushang

積義：「夜」。現代共通語では一般に“晚上”。“后晌”は軽声語[hòushang]（積義“晚上”）と非軽声語[hòushǎng]（積義“下午”）では意味が異なる。但し、文学言語は通常「軽声語」か否かの区別が不可能なので文脈から意義を判断しなくてはならない。

《现汉》に軽声語及び非軽声語の両方を方言語彙として収録（積義は前記の通り）。《古今》に未収。《汉语》に非軽声語で積義を“下午”とし、軽声語（積義“晚上”）は未収。《拼音词汇》に軽声語[hòushang]を“晚上”と注記し、非軽声語[hòushǎng]を“下午”と注記。両者とも<方>符号を付す。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言として軽声語（積義“晚上”）、非軽声語（積義“下午”）の双方を収録。軽声語は孫犁《风云初记》より挙例。《北京话》も同様に軽声語（積義“晚上”）、非軽声語（積義“下午”）を収録。一方、《山东》は積義“晚上”、“下午”の両者を軽声語とする。

《现代北京》の“后晌”は積義“下午”と“晚上”の二種類とも非軽声語とする。なお、儿化語“后晌儿”[hòushǎngr]は“下午”と積義。そして、軽声語[hòushang]は“后上”と作り、積義は“晚间”とする。《河北方言》の“后晌”は“下午”（省内大部分県通行）、“晚上”（唐山、天津地区）、“夜里”（天津地区）の三種の積義を掲げる。《吴》に未収。

《汉方大》の“后晌”は積義“晚上；夜晚”で方言点を北京官話、冀魯官話、膠遼官話、中原官

話とし、《醒》第四十四回より挙例。

《汉方词》の詞目“晚上”項で“后晌”を指す方言点は、官話の済南のみである。(なお、同書の詞目“下午”項で“后[半]晌”を指す方言点は官話の北京、西安、太原で、済南は別の語“过午；过晌午”とする)。

近世語辞典類では《例释》に積義“晚上”のみで《聊斋俚曲集》、《醒》より挙例し、積義“下午”を未収。《方言俗语》は《金瓶梅》、《醒》より挙例しているが、その積義は“下午”のみで“晚上”を挙げていない(按語に“今山东郛城、梁山、临沂等地均有此语” <p.249>とする)。しかし、《方言俗语》の積義が不適切であると言わざるを得ないのは、以下の《醒》の例を見れば歴然とするからである。

《醒》の例。第一、三、四例は“睡”が同文及びその付近に出現するので状況は「夜」と考えられる。第二例は、朝(“清早”)、昼(“晌午”)、夜(“後晌”)の食事を指す内容ゆえに「夜」である。第五例は、「川に流した灯籠」を見に行くのだから「夜」でないと灯籠の明かりが映えない。いずれにしても、これらの“後晌”は「深夜」ではないものの、「夕方」から「夜」を指す。

那是六月十五日後晌。晁夫人説：“僭早些收拾睡罷。這人們也都磨了這幾晝夜，都也乏了。”  
(30.12a.1)

(それは六月十五日の夜でした。晁夫人は「早く片づけて休みましょうよ。皆もこの何日間かは昼夜神経をすり減らし、くたびれただろう」と言いました)

先與你講論飯食，晌午要吃饅饅蒜麪，清早後晌俱要吃菘豆水飯。(31.12b.3) (“菘” = “緑”)  
(先ず、食べ物についての条件。お昼にマントウとニンニク入りのうどん、朝と夕はともにリョクトウ入りのお粥を要求する有様です)

狄周口裏不肯説出，心裏明白，曉得他往孫蘭姬家去了。直到後晌，挨了城門進來，支調了幾句，也沒吃飯，睡了。(40.3a.6)

(狄周は口にこそ出さなかったが心の中では承知している。孫蘭姬の家へ行ったことは分かっている。狄希陳は夜になり城門が閉まる時割りこんで入り、少し弁解していたが、ご飯も食わずに眠りについた)

狄周媳婦告訴説：“昨日後晌，姐姐把姐夫攆出去了，闔着門，自家睡哩。”(45.3b.8)

(狄周のかみさんは「昨夜、若奥様が若旦那様を追い出したのです。そして、戸を閉めて自分一人で寝たのです」と言った)

我再不生一點氣。到了後晌，又待看放河燈哩，前頭道士和尚領着，後頭無千帶萬的漢子追着，…。(58.7a.10)

(私はもう少しも怒っていないよ。夜になれば灯籠流しを見に行くんだ。前で道士様や和尚様が先頭を率いて、後に何千何万もの男どもが追っかけるんだ。…)

## 後生 hòusheng (又) hòushēng

積義：「若い男性、青年男子」。現代共通語では一般に“青年男子；小伙子”。

《现汉》、《古今》に方言語彙として、《汉语》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に<方>符

号を付して収める。

方言辞典類では《汉方常》に積義“青年男子”で《吳》、《太原方言词汇》、《河南方言资料》、《南昌方言词汇》、《广州话方言词典》に見えんとするだけで、地域特定していない。そして、《清平山堂话本》、《海上花列传》より挙例。《山东》にも収録。《现代北京》、《河北方言》にこの意味では未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話、中原官話、晋語、西南官話、徽語、吳語、贛語、粵語、閩語、土話とする。

《汉方词》の詞目“小伙子”項で“后生”を指す方言点は、官話の太原（“[小]后生”）、武漢のみである。但し、“后生”に接尾辞の付接した語をも含めると以下の通りになる。即ち、吳語南部の温州（“后生儿”）、湘語の長沙（“后生子”）、双峰（“后生家”）、贛語の南昌（“后生[子]”）、客家話の梅県（“后生哥、后生口”）、粵語の広州、陽江（ともに“后生仔”）、閩語の潮州、福州（ともに“后生团”）、建甌（“后生仔”）である。

近世語辞典類では《古方言》の按語に“后生不但可指男性，亦可女性。今则多指男性”とする。

《醒》の例。

原是一个寡婦婆婆，有五十年紀，白白胖胖的个婆娘，養着一个三十多歲的後生，把些家事大半都貼與了他，还恐那後生嫌憎他老，…。(12.10a.10)

(もともと一人の未亡人、手の頃五十才で白く太った女が三十余才の若者を囲っておりました。家財の多くをその男に与え、更にその若者に、自分が老けていると嫌がられるのではないかと恐れ、…)

聽候考試的日期尚早，程先生要拘住他們在下處讀書。這班後生，外州下縣的人又生在鄉村之內，乍到了省城，就如上在天上的一般，怎拘束得住。(37.7a.2)

(試験日を待っているのですが、まだ早く、程先生は彼らが下宿で勉強するよう拘束します。これらの若者は田舎の州、県、または小さな村の出身です。急に都会へ出て来たのでさながら天国へ登ったようで、どうして拘束などできましようか?)

間或有个把好先生，不似這等的，…。後生們見了八九十歲的老人家，有得好的，不過躲了開去，笑他彎腰曲背，倒四顛三的；…。(26.3b.5)

(たまには一人二人くらい良い先生がいる。そんな先生はそういう風ではない。…。若者達は八九十才の老人を見かけると、良い立派な学生は避けて、その人がへこへこ、よぼよぼしているのを笑うだけです。…)

更に“后生”には[形容詞]“年轻”の積義を表す。《现汉》に方言語彙とする。《汉方常》に胡考《上海滩》、陈残云《香飘四季》より挙例。《吳》、《广州话方言词典》に見えんとする。また、《汉方词》の詞目“年轻”項で“后生”を指す方言点は贛語の南昌、客家話の梅県、粵語の広州、閩語の廈門、潮州、福州、建甌である。これは積義“青年男子”の地域分布と比してより南方に限定されている。《醒》にこの用法は見られない。

## 呼 hū

《醒》における方言語彙“呼”の意義用法は、以下の三種存在する。

[I] (糊[hū])：積義：「[動詞]のりで貼る、じかにつける、塗る、塗り込める」。現代共通語では一般に“糊(=用较浓的糊状物涂抹缝子、窟窿或平面)；貼；抹”。なお、この種の“呼”は現代規範化文字では“糊”と作る。

《廣韻》に“糊”及び“呼”(荒烏切又火故切)は上平十一模音に属するので仮借語として使用されたのであろう。

《現漢》、《古今》、《汉语》に“糊”と作り一般語語彙として収録。《拼音词汇》に“糊”[hū]で“塗抹”(塗る)と注記して収める。別に“糊”[hú]を“粘”(べとりとつく)と注記して収める。

方言辞典類では《山东》に“糊”(積義“貼近<接近する>;接触”)及び“乎貼”[積義“貼紧”])と作る。《汉方常》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に積義“抛撒；泼洒”(まき散らす)で冀魯官話(山東省)、呉語(江蘇省丹陽童家橋)とする。ただ、この積義は下記例文を見ても明らかな如く、正確ではないと思われる。

近世語辞典類では《例释》に“呼”と作り《醒》より挙例。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“抹；塗”とする。

尋釁調羹、童奶奶，嗔他那日不極力上前，以致戴氏採髮呼尿，潑口辱罵。(80.11b.4)

(調羹や童奥さんに挑発します。即ち、あの日余り積極的に前へ出てくれなかったことをとがめるのです。それで、戴氏が髪をふんずけ、糞を塗りたくり、口汚く罵るようになったのだと)

他娘老子可纔領着許多的老婆漢子來到，搶東西，打家伙，把小女打了一頓好的，呼的滿頭滿臉都是尿。(81.2a.8)

(あの子のおっかさんとおとっさんは多くの女や男を連れて来て物を奪い、家財道具を壊しまくりました。そして、私の娘にこっぴどく殴りつけ、頭や顔全部に糞を塗りまくりました)

他娘老子可領着一大夥漢子老婆的來了家裏，打打括括的把小女採打了不算，呼的身上那尿，可是從沒受的氣都受勾了。(81.8b.3)

(あの子のおっかさんとおとっさんは多くの男や女を率い家へやって来てこてんぱんに私の娘を殴るだけで飽き足らず、体に糞を塗りたくりました。それはこれまで受けたことがない程のひどい目に遭ったのです)

《汉方大》に“呼”を積義“抛撒”(投げ捨てるようにまき散らす)、“泼洒”で方言点を冀魯官話(山東省)、呉語(江蘇省丹陽童家橋)とし、《醒》第八十一回より挙例。

[II] (焗[hū])：積義：「少量の水を入れ、ふたをきちんとして半ば蒸すようにして煮る」。現代共通語では一般に“半蒸半煮方法悶熟”。

“焗”(及び《古方言》で挙げる“炆”)字は《説文》、《廣韻》に未収。張涌泉《汉字俗语丛考》(中華書局，2000年刊)に“炆”字を収録(“焗”字は未収)。“許勿切，火氣盛兒，‘炆’乃‘焗’的俗字”とする。これでは読音が[xù]で、「火の勢いが盛んなさま」と積義する。よって、“炆”と“焗”とはやや異なる。

《現漢》、《古今》に“焗”と作り一般語語彙として収録。《汉语》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》、《北京话》、《现代北京》、《徐州方言志》に“呼”と作り収録。《汉方常》、《河北方言》に未収。

《汉方大》の“呼”（釈義“煮；炖”）に方言点を江淮官話（江蘇省塩城、阜寧）とする。

近世語辞典類では《考论》に“呼”で収録。《古方言》は“呼”（鑊、物）の項（釈義“大火煮”）で“自注：‘物音忽’。按：今俗写作‘呼’。或释为‘用锅煮东西而不掀盖叫呼吃’。其实‘呼’也可以掀盖，‘呼吃’是‘呼着吃’的意思”とする。

《醒》の例。黄肅秋注に“黄泥呼吃了他”を釈義“惟用锅指煮，用泥则指烧、烤言”とする。

素姐説：“狗。他家有長鍋，呼吃了我罷。我不知怎麼，由不的我只是生氣哩。”（44.14a.10）  
（素姐は「ばかっているわ！あの家には大ナベがあって私を蒸して食ってしまうのよ！私はなぜか知らないけれど、思わず腹が立つのよ！」と言いました）

狄婆子説：“…。我白日沒工夫黑夜也使黄泥呼吃了他。”（48.10a.4）

（狄奥さんは「…。私は昼間暇が無いけれども夜には鍋で煮て食っちゃうよ！」と申します）

素姐扎煞兩雙爛手，…大罵，説：“我又沒使長鍋呼吃你娘，呼吃了你老子，抱着你家孩子擦在井裏。…”（89.7b.8）

（素姐は両方のただれた手を広げて「わたしや大ナベであんたのおっかさんを蒸して食ったかい、あんたのおとっさんを蒸して食ったかい。お前の子供を抱えて井戸の中へ落としてやる！」とひどく罵りました）

ところで、次の例の“呼餅”は《徐州方言志》に見える“喝饼子”[xə<sup>213</sup>piŋ<sup>35</sup>tsɿ<sup>0</sup>]：“一种贴在锅里煮熟的面饼子”のことであると思われる。その例。

素姐攔住房門，舉起右手望着狄希陳左邊腮頰尽力一掌，打了呼餅似的一个焮紫帶青的傷痕，又將左手在狄希陳額子上一叉，把狄希陳仰面朝天，…。（52.4a.2）

（素姐は部屋の戸をさえぎ止め、右手を挙げ狄希陳の左ほおをめがけて力の限り一発殴ると、焼菓子のビンの様にどす黒い傷跡を残し、また、左手を狄希陳の首根っこに刺すように打つと狄希陳を仰向けに倒した）

[Ⅲ]（搨；斂[hū]）：釈義：「手で（顔や頭を）たたく」。現代共通語では一般に“打；抽”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》いずれにもこの意味では未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に未収。《北京话》、《山东》、《徐州方言志》、《现代北京》は“搨”[hū]と作り、《北京方言》は“斂”[hū]と作る。

《汉方词》の詞目“打”項で“呼”（搨；斂）を指す方言点は無い。

《汉方大》の“呼”（釈義“<用板子或巴掌等>打”）に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《百部小说》、《考论》、《例释》に“呼”で収録。《古方言》の按語で“今俗有‘搨他两耳光’，‘搨他一身泥’等语。丁惟汾《古言音释》谓‘搨’为‘麾’之双声音转，并以《诗·小雅·无羊》‘麾之以肱’为证，可备一说。或释‘呼’为‘抹、涂’，不确”とする。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。下記第二、三例の黄肅秋注に釈義“呼字作打解”とする。



他要可惡不老實，呼頓板子給他剝了衣裳，還叫他去做那徒夫。(88.12a.5)

(そいつがもし悪で大人しくない奴ならば板で叩いて着物をはぎ取り、更に徒刑罪人とすればよいのです)

書辦、門子、快手、皂隸，那行人是沒有有的。呼我等板子，只說是姐夫小舅子頑哩。(94.9a.4)

(“等” = “頓”)

(書記、門番、捕り手、下級役人などそういう輩はいないともいうのですか？板で私を叩いておきながら、婿殿、義弟は遊んでいるというのですよ)

那日審官司的時節，不是俺爺爺計會元央了直日功曹救護着，豈不被賍官一頓板子呼殺了。(11.6b.9)

(あの日、訴訟を取り調べる時、私のお爺さんの計会元が当直の功曹神に頼み込んで助けて貰わなければ、悪い役人に板で叩かれ殺されていたのではないですか？)

### 呼蘆 hūlu

積義：「脅か、脅かす、騙して脅す、ごまかす」。現代共通語では一般に“欺騙；哄騙”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山东》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例釋》、《古方言》に収録。《百部小説》に積義“吆喝；吓唬”（脅す）とし、《醒》第十回より挙例。《方言俗語》に未収。

《醒》の例。

差人道：“我拿票子到他家呼蘆他呼蘆。…”。(10.13a.8)

(下役人は「わしらがこの召喚状を持って奴の家へ乗り込んでちょっと脅してやりましょう！…」と言います)

### 葫蘆提 húlutí

積義：「いいかげんである」。現代共通語では一般に“糊里糊涂；糊涂”。

《現漢》、《汉语》、《補》いずれにも未収。《古今》に近世語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山东》、《北京話》、《現代北京》、《簡明东北方言词典》、《北京方言》、《东北方言口語词汇例釋》に未収。

《漢方大》に方言点を単に官話とする。

近世語辞典類では《方言俗語》に“明・湯显祖批注《董西廂》云：‘葫芦提，方言，糊涂也’。《通俗編》引宋・程大昌、《演繁露》亦释作‘糊涂’”とし、《金瓶梅》の他、马致远《双调夜行船・秋思》、《水浒传》、《醒》、《红梅记》より挙例。そして、“今江浙一带方言仍有此语。冀中及东北一些地方则说成‘葫芦倒提’”(p.621)とする。《百部小説》に“葫芦提”は“葫芦倒提”の省略語であるという(積義は同一)。《例釋》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“糊里糊涂”とする。

調羹倒也要與他遮盖，葫蘆提答應過去。(72.2a.4)

(調羹は素姐の失態を隠そうと思い、いい加減に答えておきました)

### 虎辣八 hūlàbā (忽拉；忽拉巴；忽爾巴；忽刺巴兒)

積義：「突然、急に」。現代共通語では一般に“忽然；突然”。

《現漢》、《汉语》、《補》いずれにも未収。《古今》に“忽刺巴”と作り近世語語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“忽刺[hūlà]”で山東等方言とし、《真本金瓶梅》より挙例。また、“忽拉巴兒”(=“忽刺巴兒”)[hūlabār]で北方方言とし、管桦《将军河》、梁斌《红旗谱》より挙例。

《山东》は“忽拉；忽拉巴；忽尔巴”などと作り、《徐州方言志》は“忽拉”を収録。また、《現代北京》は“虎拉巴兒”と作る。《北京话》に未収。

《汉方大》は“虎拉巴兒”：方言点を北京官話(北京市)、“忽拉扒”：方言点を東北官話(遼寧省義県)とする。“虎辣八”“虎拉巴”は未収。他に、“忽刺八”：方言点を単なる官話、“忽喇巴”：方言点を単なる官話とする。

近世語辞典類では《方言俗语》に“明・沈榜《宛署杂记》：‘仓卒曰忽喇叭’。清・高某《正音撮要》：‘忽喇巴即忽然间’”とし、《金瓶梅》、《云梦窗》、《醒》、《红楼梦》より挙例。ところで、《近漢》はこの語を蒙古語だとする。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“忽然、突然。亦作忽刺八”とする。

嘗時只喝一口黃酒就醉得不知怎樣的，這燒酒是聞也不聞。他虎辣八的，從前日只待喫燒酒合白鷄蛋哩，沒好送給他喫。(45.9a.1) (“嘗” = “常”)

(いつもはもちアワで作った醸造酒を一口飲むだけで酔っ払って前後不覚になります。こんな焼酎は臭いをかぐことすらしません。ところが、若奥様は急にこの間から焼酎とゆで卵をほしがるのです。送り届けないのは具合悪いです)

### 虎勢 hūshi

積義：「形勢、情勢」。現代共通語では一般に“情勢；様子”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》にこの意味では未収。《拼音词汇》に<方>符号を付すが、この意味ではないであろう。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《現代北京》にこの意味では未収。

《汉方大》に方言点を冀魯方言(山東省淄博)とする。

近世語辞典類では《例释》、《古方言》に収録。《百部小说》に積義“凶猛的样子；险恶的情势”で収録。

《醒》の例。

論這虎勢，也像似快了，只是我下意不得，指望他死。(39.14a.4)

(この様子じゃ死ぬのが早いようですね。ただ、僕は好き勝手にあの人が死ぬのを待ち望むの

はできないね)

一似他們就合我有世仇一般，恨不得不與他們俱生的虎勢。(59.7b.4)

(あいつらと私には前世からの仇があるようよ。あいつらとは共に生きてゆけないようにしたくてたまらないのよ)

### 花哨 huāshào

積義：「抑揚があって美しく人の心を打つ」。現代共通語では一般に“(鳥的叫声)婉转好听”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》にこの意味では未収。但し、積義“①颜色鲜艳。②花样或变化繁多”を一般語語彙として収録。《拼音词汇》に収めるのもこの積義であろう。

方言辞典類では《汉方常》にこの意味では未収。《现代北京》の“花哨”の積義②に“言语动听”を立項するが、これも意味がやや異なる。《山东》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話(山東省)とする。

近世語辞典類では《例释》、《百部小说》に収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

童七道：“承官兒，你不希罕銀子罷了，你沒的也不希罕會花哨的臘嘴麼。…”(70.7a.10)

(童七は「承さんや、お前は銀子なんぞ珍しくないだろうが、まさか綺麗な声で鳴くシメを欲しがらないことはないだろうね?…」と言いました)

### 花子 huāzi (化子)

積義：「乞食」。現代共通語では一般に“乞丐”。

《现汉》、《古今》、《汉语》いずれにも一般語語彙として収録。《拼音词汇》にも収録。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言とする。《山东》、《河北方言》に収録。南方方言系の辞典類《吴》、《广州话方言词典》に未収(北方方言系の辞典類《北京话》、《现代北京》にも未収)。

《汉方词》の詞目“乞丐”項で“花子(化子)”を指す方言点は官話の武漢、揚州([要饭]化子)のみである。ただ、“叫化子”を指す方言点は官話の済南、西安、太原、成都、合肥である。また、“告化子”を指す方言点は官話の武漢、呉語北部の蘇州、湘語の長沙、双峰、贛語の南昌である。

《汉方大》に未収。《现汉》に一般語語彙とするゆえである。

《醒》の例。

那老婆來到跟前，見他挺在地上流沫，攙扶不起，顧了一个花子，拉狗的一般，背在家内，灌滾水，捶脊梁，…。(57.11a.10)

(かのかみさんがそばへ来ますと、彼は地面に横たわり泡を吹いていて抱え起こせません。一人の浮浪者を僱い、イヌを引きずるように家の中へおぶって行き、煮え湯を口に流しこみ、背中を軽く叩いた。…)

また、“叫化子”[jiàohuāzi]とも作る。

大年下，就是叫化子，也討人家個饅饅嘗嘗，也討個低錢來帶帶歲。(3.8a.3)

(年越しなのだから。たとえ乞食であっても人様にマントウを求め、小銭を求め、お正月の準

備をするものよ！)

**還惺 huánxing** (還省；還性；緩醒)

積義：「蘇る」。現代共通語では一般に“苏醒”。

《現漢》、《漢語》に未収。《古今》に“緩醒”と作り、《補》に“還醒”と作る。いずれも一般語語彙として収録。《拼音词汇》に“緩醒”で収める。

方言辞典類では《漢方常》に“還醒”で北方方言とし、《醒》より挙例。また、“緩醒”とも作り北方方言とし、評書《夢狼》、老舍《龍須溝》より挙例。《北京話》、《現代北京》は“緩醒”、《山東》は“還醒；還哄；還還”で収録。《河北方言》、《吳》に未収。

《漢方大》に“還性”、“還省”で方言点を冀魯官話(山東省淄博)、“還醒”で方言点を冀魯官話(河北省保定。山東省淄博)、“緩醒”で方言点を東北官話(東北)、北京官話(北京市)とする。

近世語辞典類では《考論》、《例釋》は“還惺；還省；還性”で収録するが、《醒》も同様の標記がある。

《醒》の例。

我使的慌了，你且拿下去想想，待我還惺還惺再教。(33.11a.6)

(ワシはとても疲れたよ。ひとまずお前は持って行ってよく考えておきなさい。私が元気になってからまた教えてしんぜよう)

正亂哄着，素姐還省過來。(63.8a.4)

(ちょうどわいわい騒いでいる所へ素姐は漸く正気を取り戻した)

那狗死過去了半日，蹬掙蹬掙的，漸漸的還性過來，趴起一怵一跌的走了。(58.4a.7)

(そのイヌは長い間気絶し、足をひきつらせていたが、段々と息を吹き返し、のそりと起き上がってはよたよたと歩いていった)

**喚 huàn**

積義：「呼ぶ、大声を出して呼ぶ」。現代共通語では一般に“叫；喊”。

《現漢》、《古今》、《漢語》いずれも一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に太原方言とする。《吳》に未収。

《漢方大》に方言点を北京官話(河北省涿県)、晋語(山西省太原、榆社)、江淮官話(江蘇省南通)、西南官話(湖北省武漢)、郷話(湖南省沅陵)とする。

《漢方詞》の詞目“叫”項で“喚”を指す方言点は無い。ただ、“叫喚”を指す方言点であれば官話の北京、濟南、西安、太原、成都とする。

《醒》の例。

狗起先叫了兩聲，聽見是熟人喚他，就隨即住了口。(19.14a.3)

(イヌは初め二三度吠えたが、見知った人の声で呼ぶのを聞き直ちに吠えるのをやめた)

問：“你喚那珍哥叫甚麼。”回說：“叫姨。”(12.11b.5)

(「珍哥を何を呼んでいるのか？」と尋ねますと「妾の珍ねえさんと呼んでいます」と答えます)

### 渾深 húnshēn (渾身)

積義：「[副詞] どうせ、どのみち」。現代共通語では一般に“横竖；反正”。

《現漢》、《古今》、《汉语》いずれも“渾身”と作り“全身”と積義、一般語語彙で収録。しかし、副詞（「どうせ、どのみち」）の意義用法は未収。《補》にも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“渾深”と作り、積義“反正”、山東方言で《醒》より挙例。《北京話》、《山東》にこの意味では未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《汉方詞》の詞目“反正”項で“渾深”を指す方言点は無い。

近世語辞典類では《例釋》、《近漢》、《百部小説》に収録。《古方言》の按語に“‘渾身’是‘横竖’之音。急言为‘浑’。‘浑是’也可说成‘横是’，可资佐证”とする。《方言俗語》にこの意味では未収。

《醒》の例。

言姐道：“你去對爹說，你說下來了，我有好到你；你要說不下這事來，你渾深也過不出好日子來。”（68.8b.4）（“言” = “素”）

（素姐は「あんたはお義父さんに言うんだね。言って納得させてくれたならよくしてあげるけれども、そうでなければ、どのみちまっとうな生き方はできないよ」と言った）

我計的往你家來時，衣裳穿不了，青表藍裏梭布夾襖，藍梭布褲，接去的媳婦子還夾拉着來了，這渾深不是你晁家做的，你也做主燒了罷。（92.11b.5）（“計” = “記”）

（わたしや覚えちゃいるが、おっかさんがあんたの家に来た時黒い表で裏が青の木綿布裏付の上着と青色木綿のズボン、これは迎えに出た下女はなおも脇の下にかかえて持って行きましたよ。この分は、どのみちあんたの家でこしろえたものではないでしょう。それでもあんたの一存で葬礼に焼くというのかえ？）

《醒》では“渾深”と作るのが多いが、時に“渾身”とも作る。黄肅秋に積義“这里作横竖、反正、横了心的意思”とする。その例。

抗着俗那穀，不希罕使他的。看我餓殺不。留着俗秋裏蔭棗魅，也渾深丟不了。晁淳。晁鳳。俗留着，慢慢的算帳，再看本事。（32.13a.9）（“抗” = “扛”）

（俺達のコメをかついで行け。あんな人のをありがたがるものか！ワシが餓死するとでも思うのかい！ワシらの秋の干しナツメをしまっておくんだ。どうせ捨てる物ではないんだぜ。晁淳！晁鳳！見ておれよ。ゆっくりと落とし前をつけてやるからな。ワシの力を見せてやる！）

しかしながら、一般に《醒》での“渾身”は“全身”の意義用法である。“全身”の意義では《北京話》にも収録する。なお、《汉方大》に積義[副詞]“完全”で呉語（上海）とする。

《醒》での“渾身” = “全身”の例。

直到那掌燈的時節，漸漸的省來，渾身就如網綁了一月，打了幾千的一般痛楚，…。（11.7a.2）（“網” = “捆”）

（灯をともし頃になり、段々と正気が戻ってきた。全身がまるで一カ月も縛られた、また、何千回も叩かれたような苦痛があった。…。）

晁夫人唬得通身冷汗，心跳得不住，渾身的肉顫得葉葉動不止。(20.2b.4)

(晁夫人はびっくりして全身冷や汗をかき、心臓はドキドキと早鐘を打ち、全身の肉はどれも震えてとまりません)

### 豁鄧 huōdeng

積義：「かき乱す、迷惑をかける、邪魔をする」。現代共通語では一般に“搅和；搅扰”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《百部小说》、《例释》に収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“搅扰；挥撒；败坏”とする。

龍氏…罵説：“…。我抛你家米，撒你家的麩，我要不豁鄧的你七零八落的，我也不是龍家的丫頭。”(48.11b.4)

(龍氏は…罵って「…。わたしや家の米をほっぽり捨て、麩をばらまき、家の物をかき乱し、滅茶苦茶にしてやる。それでなくっちゃ、わたしや龍家の娘ではないよ!」と言った)

### 豁撒 huōsa

積義：「浪費する、まき散らす」。現代共通語では一般に“挥霍；抛撒”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に山東方言とし、《醒》より挙例。《北京话》、《现代北京》、《山东》、《河北方言》、《徐州方言志》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話（山東省聊城）とする。

《汉方词》の詞目“浪费”項で“豁撒”を指す方言点は無い。なお、“抛撒”を指す方言点は官話の武漢、成都である。

近世語辞典類では《百部小说》に“豁撒”を“抛撒；挥霍”と積義する。《例释》にも収録。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に積義“挥霍；胡花”とする。

要是我不得這命，就是俺婆婆留下的這幾兩銀子，我不豁撒他个精光，我待開交哩。(64.8a.9)

(もし私がこの命拾いをしなければ、たとえお義母さんが残してくれた幾らかの銀子をも私はすっかり使い切れませんよ。それで私が片をつけられるとでもいうの?)

### 活泛 huófan (活翻；活分)

積義：「機敏である、臨機応変にする」。現代共通語では一般に“灵活；随机应变”。

《现汉》、《古今》(“活分”とも作る)、《汉语》(“活分”①鬆軟不堅實。②性情活潑)に一般語彙として収録。《拼音词汇》にも<口>符号を付して収録。

方言辞典類では《汉方常》に“活泛”と作り北方方言(積義“①灵活；能随机应变。②活跃。③

<经济>寛裕)、“活分”及び、“活份”と作り北京方言とする。《山东》、《北京话》(“活翻；活分”とも作る)、《北京方言》(“活翻；活凡；活尅”とも作る)、《现代北京》にも积義“①灵活；随机应变。②灵活；机灵”で収録する。《河北方言》の“活凡”は积義“物体不稳固”でやや異なる。

《汉方大》に方言点を北京官話、冀魯官話、中原官話、晋語、蘭銀官話、江淮官話、西南官話、呉語、湘語、贛語とする。また、“活分；活份”とも作るとする。

近世語辞典類では《古方言》に积義“灵活；不呆滞”で《水滸傳》、《醒》より挙例。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

送這差不多五十兩銀子已你，指望你到官兒跟前說句美言，反倒証得死拍拍的，有點活泛氣兒哩。(13.9b.1) (“已” = “己”)

(このほぼ五十両の銀子をお前にやったんだぜ。役所へ行きその前で良く言ってほしいからだったんだ。なのに、かたくなな証言をしてからに。少し融通をきかせてくれてもいいのによ！)

### 活絡 huólò

积義：「(話す言葉や物事をなすのが)不確定である」。現代共通語では一般に“(说话、做事)不確定”。“活絡”は現代語に於ても多義語である。

《现汉》に积義“①(筋骨、器物的零件等)活动。②灵活；不確定”、方言語彙として、《古今》に积義“①灵活；不肯定。②动摇；不固定”で一般語語彙として収録。《汉语》に积義“圓活”(融通性に富む、如才ない、融通無礙である)とする。《拼音词汇》に<方>符号を付して収めるが、积義は不明。

方言辞典類では《汉方常》に积義を第五項まで挙げるが、积義第三項“(说话、做事)不確定”を呉方言として海上说梦人《歇浦潮》より挙例。《山东》にも积義“无主见；拿不定主意”、“不确定的；能通融的”で収録。《河北方言》の詞目“活絡”は积義を“物体不稳固”とするので異なる。《北京话》、《现代北京》、《徐州方言志》に未収。

《汉方大》に方言点を東北官話(東北)、冀魯官話(山東省)、晋語(山西省忻州)、呉語(上海市。上海嘉定。江蘇省蘇州、常州。浙江省杭州)とする。

近世語辞典類では《考论》、《例释》に积義“不確定；模稜两可”、《古方言》に积義“圓通灵活”で収録。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

凡來問甚麼的，大約都是這等活絡說話。(42.7b.5)

(凡そ何を尋ねて来ても大体全てこの様に途方もないような受け答えでした)

周嫂兒見童奶奶拒絕的不大利害，都是些活絡口氣，隨即將狄希陳的話說加上了許多文彩，…。(75.11b.7)

(口入れ屋の周嫂は童奥さんが余りひどく拒否するのではなく、少々曖昧な口ぶりなのを見て取り、すぐさま狄希陳の話に多くの飾り付けをほどこし、…)

## 火勢 huǒshì

積義：「情勢、形勢」。現代共通語では一般に“情勢；様子”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》にこの意味では未収。ただ、《現漢》、《古今》に積義“火燃燒的情況”が一般語彙として収録。《拼音词汇》に収めるのもこの積義であろう。なお、《補》に積義“熱鬧；火炽”が一般語彙として収録。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《河北方言》に未収。《現代北京》は轻声語“火炽”（火勢）[huǒshì]で積義“活力；熱鬧；氣氛熱烈；充滿活力”とし、やや異なる。

《漢方大》に積義“情勢；様子”で方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

近世語辞典類では《例釋》に収録。《百部小説》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

晁無晏瞪着一雙賊眼，恨不得喫了晁近仁的火勢，說道：“……。”（22.10b.2）

（晁無晏は二つの恐ろしい目でにらみ、晁近仁を呑み込んでしまいたくてたまらない様子です。そこで、言いました「…」）

倒沫到日頭待沒的火勢 方纔同着狄周回到下處 又還待卸下行李住下 要明日走罷。（38.12a.3）  
（ぐずぐずしていたが、日が暮れるようになって漸く狄周と共に宿へ戻り、また荷物を卸し、明日発とうとするのです）

狄相公倒沒打他八分死，狄相公被他咬的待死的火勢哩。（73.10b.7）

（狄旦那さんならひどく殴るなんてできません。逆に彼女から噛まれて今にも死にそうですよ！）

兩個道：“他盼得眼裏滴血的火勢，俺且那裏合他說聲，在等回話。”（75.12a.9）

（二人は「あの人は待ち遠しくて目から血が出るようなあんばいですよ。私らはあちらへ行って少しお話をしてきます。それからお返事します」と言いました）

## J

## 積泊 jībo

積義：「善行または悪行による報い」。現代共通語では一般に“因行善或作恶而得到报应”。また、“積”のみでも同様の積義を有す。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《現代北京》に収録。《漢方常》、《山東》、《河北方言》に未収。

《漢方大》に“積”で方言点を北京官話（北京市）、冀魯官話（山東省）とする。また、“積泊”で冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《古方言》に“積泊”（積作）を積義“因作善或作恶积聚而成的結果”とし、その按語で“今俗说成‘积掇’，也说成‘积崇’。湖北襄樊则称‘积作’”とする。《例釋》、《方言俗語》にも収録。《百部小説》にこの意味では未収。

《醒》の例。



狄婆子折身回去，一邊說道：“前生，前生，這是我半輩子積泊的。”(48.6a.3)

(狄奥さんは体の向きを変えて戻って行き、一方で「前世、前世ですよ。これは私の半生の業報だよ!」と言った)

薛如卞道：“…。只怕說這是薛如卞薛如兼的姐姐，他爹做了場老教官，兩個兄弟捺着面，戴着頂頭巾，積泊的个姐姐這們等。”(68.11b.8)

(薛如卞は「…。それは薛如卞と薛如兼の姉さんだ、お父さんは長い間教官をしていたし、二人の弟は恥知らずにも秀才頭巾をかぶっているんだよ、悪行の報いが姉さんをこんなことにしたんだ。と言われますよ」と申します)

### 咕咕 jigu (擠咕<眼兒>)

積義：「眼をしばたたく、目くばせする」。現代共通語では一般に“眨眼；挤眼”。“咕咕”を“叭咕”“唧咕”と考えれば、この積義は“小声说话”とするべきであるが、“擠咕”[jigu]の同音仮借語と解すれば“擠(眼)”と積義できる。《醒》での用法は文脈から判断すると後者である。

《現漢》に“擠咕”と作り方言語彙として、《汉语》に“擠咕眼(儿)”と作り一般語語彙として収録。《古今》に未収。《拼音词汇》に<方>符号を付して収録。

方言辞典類では《漢方常》に“擠咕”で北方方言とし、《北京晚报》、《科尔沁旗草原》より挙例。《北京话》は“擠咕”、“擠咕眼儿”とし、《河北方言》は“擠古眼儿；擠拉眼儿”等と作る。《山东》は“擠古；擠嘎”等と作り、《現代北京》は“擠咕；擠箍”と作る。《吳》に未収。

《漢方大》は“擠咕”を“擠(眼)”と積義し、方言点を東北官話(東北)、北京官話(北京市)、冀魯官話(天津市。河北省東部)、中原官話(新疆維吾爾自治区吐魯番)、蘭銀官話(新疆維吾爾自治区烏魯木齊)とする。

ところで、《例釋》は“擠咕”と積義すべき所を“叭咕”(小声で話をする)と解釈しているが、不適切である。

《醒》の例。文脈からいえば“两只眼”を“咕咕咕咕”(しばたたかせる)と積義するのが自然である(《考論》p.193)。黄肅秋注に積義“形容小声说话”とするが、不適切である。

臥榻中，睡着一個病夫，塌跣着兩只眼，咕咕咕咕。(2.8a.1)

(寢台の上で一人の病人が元氣のない目でしばたたかせています)

### 咕聒 jiguō (急聒；聒聒；咕咽；激聒)

積義：「小声で話をする、ひそひそ話をする」。現代共通語では一般に“叭咕；唧咕；咕咕”。

《現漢》、《古今》に“叭咕；唧咕”と作り、《汉语》に“唧咕”と作る。いずれも一般語語彙として収録。《拼音词汇》に“叭[唧]咕”[jigu]で収録。

方言辞典類では《山东》(“唧咕”)、《北京话》、《現代北京》、《河北方言》(“唧咕；叭咕”)に収める。《漢方常》にこの意味では未収。

《漢方大》は“咕咽”の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》第九十一回より挙例(下記例“咕聒”の箇所)。

近世語辞典類では《方言俗語》に“咕咕咕咕；咕咕聒聒；击击聒聒”の三種類の表記を掲げるが、《例釋》は“咕咕聒聒”を挙げるにすぎない。非重疊語では《例釋》に“咕咕；咕聒；激聒”を《水滸》、《金瓶梅》、《醒》、《真本金瓶梅》より挙例。

《醒》の例。“咕聒”と作る。

就是有這樣一個鄰家，不住的打罵，也定是住不安穩，不是你避他，定是他情願避你，也受不得日夜的咕聒。(91.4a.10)

(即ち、こんな隣家がとめどもなく殴り罵ればきつと落ち着いて住めないし、その人を避けさせるのではなく、必ずやその人が避けたくくなります。また、毎日毎晩くどくどやかましいのには耐えられません)

次は重疊型の例。《汉方大》に呉語とし、《醒》第八十八回より挙例。

依了韋美的念頭，有錢的人家，多費了幾斗米，倒也不放在心上。禁不得那渾家日逐在耳邊頭咕咕聒聒，疑起心來。(88.1b.10)

(韋美 of の考えではお金持ちゆえに何斗かのコメを多く費やしても気にかけていない。ただ妻が毎日耳元でぶつぶつ言うので疑心を起こしてきたのである)

“咕聒”は“激聒”とも作る。その例。

有的說他順了也先，有的說他死有余恨，還該滅他三族，窮搜他的黨羽，窮言雜語，激聒个不了。(15.2a.7)

(ある人は、奴は先に服従した、またある人は、奴は死んでも残された恨みがあると言う。なおも奴の三族を皆殺しにし、徹底的に奴の郎党を捜し出し、がやがや騒がしいのをなくさればならん)

有那正經的男子，曉得那正妻不是這般的毒貨，兒子們不是歪人，憑他激聒，不要理他；有那等沒正經的昏人，…。(36.3b.10)

(まともな男子は、正妻がこんなにも悪い輩ではないと分かっている。息子達も変な人ではないのでそいつに好きにべらべらやらかし構うことをしない。ところが、訳の分からないばかな人は、…)

ただ、次の“激聒”は積義がやや異なる。《汉方大》はこの“激聒”を“鼓动劝”と積義し、方言点を冀魯官話(山東省)で《醒》第八回より挙例。

他因自己發願好了病要做姑子，所以日日激聒那劉夫人。(8.8b.5) (“已” = “己”)

(彼女は自身で「(肺結核の) 病気が良くなれば尼僧になります」と発願していたものですから、毎日毎日、かの劉夫人に働きかけて言った)

## 鷄子 jizi (鷄子兒)

積義：「ニワトリの卵」。現代共通語では一般に“鸡蛋”。

《現漢》は“鷄子兒”、《古今》は“鷄子(兒)”、《汉语》は“鷄子”“鷄子兒”と作り、いずれも一般語彙で収録。《拼音词汇》にも儿化語“鷄子兒”で収録。

方言辞典類では《汉方常》に儿化語“鷄子兒”で北方方言とし、《老舍文集》第三卷より挙例。《北

京話)、《現代北京》にも儿化語“鸡子儿”で収録。《河北方言》の詞目“鸡蛋”項に非儿化語“鸡子”を指す省内方言点は、天津地区の永清・滄州・霸県・安次、承德地区の围場、石家莊地区の武邑・新楽、邯鄲地区の魏県・広宗・任県・肥郷・涉県・邯鄲市、唐山地区の大厂の如く広域にまたがるが、儿化語“鸡子儿”は唐山地区の楽亭、天津地区の天津市・呉橋でしかない。《山东》に未収。

《汉方词》の詞目“鸡蛋”項で“鸡子儿”を指す方言点は官話の北京、済南のみ。同書詞目“卵”項で“子(儿)”を指す方言点は官話の北京、済南、西安、太原、合肥、揚州、呉語北部の蘇州、湘語の長沙、双峰、贛語の南昌、閩語の福州である。

因みに、“鸡蛋”を南方では“鸡卵”という。更に、同書詞目“鸡蛋”項で“鸡卵”を指す方言点は呉語南部の温州、客家語の梅県、閩語の廈門、潮州、福州、建瓯である。

現代語では儿化した“鸡子儿”が一般的であるが、《醒》に於ては非儿化語“鸡子”[jizi]である。《汉方大》に“鸡子”の方言点を北京官話、徽語、呉語、贛語とする。儿化語“鸡子儿”は未収。近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

再說那日晁夫人先使人送了一百個煮熟的紅鷄子，兩大盒趕就的麪與徐大尹，收了，賞了家人二百文銅錢。(21.7b.7)

(さて、その日、晁夫人は先に人をやって百個のよく煮た赤いニワトリの卵、二箱の麵棒でのしたうどんを徐大尹に届けさせた。家の使用人には二百文の銅錢を褒美に与えた)

叫玉蘭拿過那尊燒酒，剝着雞子，喝茶鐘酒，喫個雞蛋，喫的甚是甜美。(45.10a.7)

(玉蘭を呼んでその焼酌を持って来させ、ニワトリの卵の殻を剥きます。茶や酒を飲みながら卵を食べると、とてもおいしいものです)

上記第二番目の例は“雞子”と“雞蛋”とを同一文中で用い完全な同義語としている。

「たまご」に「硬い殻がある」か否かは、例えば「カエルのたまご」は硬い殻が無い。しかし、ニワトリやアヒルの卵は硬い殻がある。この様な観点から「たまご」を表す語を大雑把に南北で分けると次の如き表になる。

	“蛋”(硬い殻がある)	“卵”(硬い殻は必ずしも無い)
北方	蛋	子(儿)
南方	卵	卵

“蛋”と“卵”、“子(儿)”は「硬い殻がある」か否かで区分されるが、それも南方諸方言ではどちらも“卵”である。

また、「たまご」を表す語を口語と書面語に分けると次の表になる。

たまご	口語	“蛋”
	書面語	“卵”

## 賣子 jizi

釈義:「おちんちん」。現代共通語では一般に“男孩生殖器”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》に“賚子”では未収。近似文字の“賚子”で収録。“賚子”項を参照。

《汉语异名词典》に“賚子”「积義“阴茎”，方言」で《醒》第三十七回より举例。

《汉方大》に“賚子”で方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》、《古方言》に“賚子”[jīzi]で収録。《百部小说》に“賚子”では未収。近似文字の“賚子”[làiizi]で収録。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。齊魯書社本、排印本上海古籍出版社は“賚”[làiizi]であり、“賚子”[jīzi]を用いない。木刻本の人民文学出版社本、古本小説集成本でも不鮮明のため、どちらの文字にもとれる。

人家放着這們大的閨女照着他扯出來賚子來溺尿。(40.11a.3)

(あの人こんな大きな生娘に向かっておちんちんをひっぱり出しておしっこをするんですよ！)

但し、不鮮明で判定しにくいのが、古本小説集成本では次の“賚子”の箇所が“賚子”に見えなくもない。

“好讀書的小相公。人家這麼大閨女在此，你却抽出賚子來對着溺尿。”(37.7b.4)

(立派に学問なさっている坊ちゃんが！こんな年頃の娘がここにいるのにおちんちんを引っ張り出し正面からおしっこをするなんて！)

## 極 jí (急)

积義：「慌てる、焦る」。現代共通語では一般に“急”。

《常用词古今义例释》に“极”（極）と“亟”はもと別々の意義を有する語であったが、“極”は“亟”[jí]に従うとすることにより、典籍も“極”字を借りて“亟”を表すようになったという(p.181)そこでの用例は《荀子・賦篇》より引く。

また、“急”は“亟”に通ず。というのも“亟”は《説文》に“敏疾也”とする。即ち、本義が“急速；趕快”である。そして、“急”に“快”；“急速”の意義を有し、同義だからである。

以上のことにより、“極”が“亟”の仮借語となった後は“急”の意味で用いられるのも首肯できる。

《现汉》、《补》にこの意味では未収。《古今》の“极”に“古通‘亟’：急”とし、《汉语》に“‘極’与‘急’通”とする。

方言辞典類では《汉方常》に呉方言とし、張南庄《何典》より举例。《吳》は《杂格犹咚集》、《何典》より举例。呉語系語彙ゆえに《北京话》、《现代北京》、《山东》、《徐州方言志》等の北方語系方言辞典類に未収。

近世語辞典類では《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。いずれも“得”を伴う補語構造に限定される。

頭長身大的學生，戴着回回鼻跳搭，極得个老子像猴似的。這帖子你不該寫麼。(33.7a.8)

(頭や体が大きい書生が鼻の大きい面をかぶって跳びはねているので、慌てておとっさんはまるでサルのように！この招待状はお前が書くべくじゃないのかい？)

宗昭原是寒素之家，中了舉百務齊作的時候，去了這四十兩銀，弄得手裏掣襟露肘，沒錢使，極得眼裏插柴一般。(35.10a.3)

(宗昭はもと貧困の家柄でした。今、科挙試験に合格し、諸々の事を一斉にやる時、この四十兩の銀子を取られては、手元には襟を引っ張って肘を露わにする如く、使う金がなく、目の中に薪を挿す如き慌てぶりです)

及至粧完了藕 那碗裡的雞少了一半，極得狄周媳婦只是暴跳 …。(48.4b.6) (“粧” = “裝”)  
(レンコンを入れ終えるに至り、その碗にニワトリが半分減っていた。狄周のかみさんは慌てて、ただただカンカンに怒り、…)

### 急巴巴 jibaba

釈義：「慌てているさま、慌てている」。現代共通語では一般に“急忙；焦急の様子”。

《現漢》、《漢語》に一般語語彙として収録。《古今》、《補》に未収。《拼音词汇》にも未収。方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》に方言点を東北官話（吉林省）、冀魯官話（河北省中部、山東省）とする。

近世語辞典類では《例釋》、《方言俗語》に収録。《方言俗語》は“急波波”で立項。即ち、“急巴巴”だとする。《古方言》、《百部小説》に未収。

《醒》の例。

二人急巴巴收拾不迭，行李止粧了个褥套，別樣用不着的衣裳也都丢下了。(15.8a.5)

(“粧” = “裝”)

(二人は慌てて準備に取りかかった。荷物は単に布団をつめこみ、他の取り急ぎ使わない着物は全て置いておいた)

### 己 jǐ (給)

釈義：「①[動詞]あげる、渡す。②[介詞]…に（あげる）」。現代共通語では一般に“给”[gěi]。“己”は単なる同音仮借だと考えられるが、《漢方大》に見えるのは方言語と認めているからである。

“己”は《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に上記釈義では未収。但し、同音語“给”[jǐ]で各辞典に立項。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》に未収。

《漢方大》に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例釋》に収録。《百部小説》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

“己” = 介詞の例（「己 + N + V」の例）。前記釈義②である。

劉夫人道：“…。不當家，不當家，快己他做道袍子，做唐巾，送他往南門上白衣庵裡與大師傅做徒弟去。”(8.10b.7) (“己” = “己”)

(劉夫人は「…。恐れ入ったよ。早く道袍、唐巾を作ってやり、南門のあたりにある白衣庵へ送り届け、尼様の弟子になったらいい!」と言った)

珍哥道：“沒那放屁。我打殺那私窠子來。抖出那私窠子，番尸簡骨，若有傷 我已他償命；…”  
 (11.5a.4) (“簡” = “檢”) (“已” = “己”)

(珍哥は「何とバカなことを！私がかの娼婦をぶち殺したとでも言うの？あの娼婦の棺桶を暴いて骨を調べればいい。もし傷があれば、私はそいつの為に命を償うよ。…」と言った)

“V己”の例。

楊春道：“你說的甚麼話。我一个錢賣已你，清早寫了文書，後晌就是你的物業；你掘幾千幾萬也就不與我相干了。…” (34.5a.8) (“已” = “己”)

(楊春は「何をおっしゃるのですか。私はあなた様にお売りしたのです。あなた様は仁義のあるお方です。私が貧乏なのを見かねて幾らか小銭を下さっても、私はあなた様の為に念仏を唱えますよ。よしんば、一銭も私に下さらなくても、それはそれで元々の事ですから。…」と申します)

“給”の例。但し、動詞の用法で、まだ介詞の用法は出現していない。

楊春説：“可不仔麼。叫我説着沒極奈何的，給了我一罈薄酒來了。” (34.6b.6)

(“罈” = “壇”)

(楊春は「そうともさ。ワシはどうしようもなかったんだ。ワシに一カメの薄酒をくれるとのことだね」と申します)

晁夫人説：“也罷，我再給你二兩銀，完成了這件事罷。省得你又別處滕那。” (36.9a.9)

(“滕” = “騰”) (“那” = “挪”)

(晁夫人は「仕方がないわ。私がもう二両の銀子をあげるから、この件を落着させましょう。あなたが他の所で工面することがないようにね」と申します)

## 濟 jì

[I] 釈義：「良い」。現代共通語では一般に“好；行”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》にこの意味では未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》にこの意味では未収。

《漢方大》に方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《百部小説》、《例釋》に収録。《方言俗語》、《古方言》にこの意味では未収。

《醒》の例。いずれも否定形“不濟”とする。

若只做出家常飯來，再人材不濟，十來兩十二三兩就買一个。(55.2a.8)

(もし、普通の料理をこしらえられて器量もさほど良くなければ、十両か十二三両で一人買えます)

待兩日試得果然是那全灶的本事，也不肯少與你，足足的兌上二十四兩老銀。若本事不濟，再往下講。(55.8b.4)

(二三日使ってみて、果たしてその料理人としての腕があるなら、お礼は足りないなんてしません。きちんと二十四両の老銀にしましょう。もし、腕が悪ければ、値段はもっと下げますよ)

[II] 積義：「役に立つ」。現代共通語では一般に“好处；益处”。

《現漢》、《古今》、《汉语》に一般語語彙として収録。《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山東》、《現代北京》、《河北方言》にこの意味では未収。

《漢方大》にこの意味では未収。

近世語事典類では《百部小説》に収録。《方言俗語》、《古方言》にこの意味では未収。

《醒》の例。

真君説；“…。綿衣雖是目下熱些，天涼時甚得他濟。”(29.12a.9)

(真君は「…。綿の布は、今暑いですが、気候が涼しくなった時に役に立ちます。」と言いました)

### 記掛 jiguà

積義：「気にかける」。現代共通語では一般に“惦念；挂念”。

《現漢》、《古今》に方言語彙とする。《汉语》に“猶言惦念”とする。《拼音词汇》に<方>符号を付す。なお、《現漢》に“惦记”、“惦念”、“挂记”[guàji]、“牵挂”、“牵记”は一般語語彙とする。

方言辞典類では《漢方常》に“记挂”を粵語、吳方言で欧陽山《苦斗》、巴金《春》より挙例。《吳》に“记挂(積義“挂念；惦念”)、また、その逆語序の“挂记”及び同義語“牵记”を収録。《广州話方言词典》、《河南方言資料》に“记挂”を収録。《山東》、《現代北京》、《徐州方言志》、《河北方言》、《閩南方言》に未収。一方、《吳》、《广州話方言词典》に“惦念；挂念”の語が無い。したがって、“惦念；挂念”に対応する“记挂”は南方語であると判断される。

《漢方詞》の詞目“挂念”項で“记挂”を指す方言点は官話の揚州のみである。ここには粵語、吳語に無い。

《漢方大》に“记挂”を積義“挂念；惦念”で方言点は中原官話(河南省鄭州)、江淮官話(江蘇省南京、揚州。安徽省含山、和県、定遠、嘉山、全椒、来安、天長、貴池、蕪湖、当塗、馬鞍山)、徽語(安徽省歙県、績溪)、吳語(上海市。江蘇省丹陽、江陰。浙江省杭州、平陽、麗水、嘉興、金華、紹興)、贛語(江西省新余)、客話(江西省贛州蟠龍)、粵語(広東省広州)、閩語(福建省廈門)とする。

近世語辞典類では《百部小説》、《例釋》、《古方言》、《方言俗語》に未収。太田辰夫 1964「《紅樓夢》の言語について」は“记挂”と“惦记”を南方語・古白話と普通話の関係にしている(p.205)。

《醒》の例。

晁大舍叫人在鼻尖上抹上了一塊沙糖，只是要去舐喫，也不想往臨清去了；也不記掛着珍哥，丟與了晁住，托他早晚照管。(19.6b.7)

(晁大舍は鼻先に砂糖を塗り付けられたように、ただそれをなめたくてしかたないと思うのである。臨清へ行こうとも思わないし、珍哥のことを気にかけることもなく、晁住に監獄での朝夕の世話を任せていた)

狄婆子叫狄周：“你就找个便人稍个信回去，省得家裏記罨，…”(40.14a.4) (“稍” = “捎”)

(狄奥さんは狄周を呼んで「お前、誰か人に知らせに戻ってよ。家では心配しなくてもよいよ

うに。…。」と言った)

### 夾布子 jiābùzi

釈義：「生理帯、月経帯」。現代共通語では一般に“月经布；月经带”。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話（山東省済南）とする。

近世語辞典類では《百部小说》、《例释》、《古方言》に収録。《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

珍哥…罵道：“…。把那白綾帳子拿下來，我待做夾布子使哩。”（11.4b.8）

（珍哥は…罵って「…。その白い綾子のとばりを取り外し、生理帯にして使ってやる」と言った）

### 家去 jiā qù

釈義：「家へ帰る」。現代共通語では一般に“回家（去）”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《汉语》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《现代北京》に[jiā qù]の他に北京方音 [jiā qie]も収録。《河北方言》の詞目“回家了”項に“家去了”“家来了”等を収録。《汉方常》、《山东》に未収。

《汉方大》に方言点を冀魯官話（天津市）、膠遼官話（山東省牟平）、中原官話（山東省費県）、江淮官話（安徽省蕪湖。江蘇省揚州、泰興）、呉語（江蘇省常州、丹陽童家橋、常熟、金壇西崗、靖江）とする。

近世語辞典類では《例释》、《百部小说》に収録。《方言俗语》に“今徐州方言仍说‘家去’、‘家走’”とする。《古方言》に未収。

《醒》の例。

不料狄員外同了他在那裏守靈，連相于廷也不曾家去，陪伴宿歇。（60.7b.10）

（図らずも、狄員外は息子と共にそこで通夜しています。相于廷すらも家へ戻らず傍らに待って夜をすごします）

### 家生 jiāshēng

釈義：「家具、用具、器物」。現代共通語では一般に“家什；家具；用具”。

《现汉》に未収。《补》、《古今》に方言語彙として、《汉语》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に呉方言として《古今小说》、《虹南作战史》、《海上花列传》より挙例。《吴》は《海上花列传》、《古今小说》より挙例。南方語系語彙だからであろう、《山东》《北京话》、《现代北京》等の北方語系辞典に未収。

《汉方词》の詞目“家具”項で“家生”を指す方言点は呉語の蘇州、温州のみである。

《汉方大》に方言点を呉語（上海市、崇明、松江。江蘇省蘇州、無錫、常州、呉江、江陰。浙江



省温州温岭、绍兴、黄岩)、客話とする。

近世語辞典類では《古方言》に積義“器用、器械的总称”(器具の総称)とする。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》は基本的に北方語系語彙が多い白話資料であるが、その中には下記例の如く、現代吳方言に残存している語彙も少なからず見られる。《醒》の例。

吃完了酒,收拾了家生,日以为常。(24.7a.6)

(お酒を飲み終わると、食器などを片付けるのを日課としていました)

收拾了一所不大的潔净房,緊用的家生什物也都粗備。(53.2b.2)

(さほど大きくはない清潔な家を用意し、いつも必要な家財道具は全て大体揃えていた)

なお、北方語系辞典類《山东》、《北京话》、《现代北京》は轻声語“家什”[jiāshi]と作り積義“器具；家具”“工具”とする。

《汉方词》の共通語詞目“家具”項で南北の語彙分布を見れば、次の如く大きく二つに区分できる。

“家具”：官話(北京、済南、西安、武漢、合肥、揚州)、湘語(長沙)、贛語(南昌)

“家私”：湘語(長沙、双峰)、客家話(梅県)、粵語(広州、陽江)、閩語(廈門、福州、建瓯)

即ち、北方では“家具”、南方では“家私”。この重なる所が湘語(長沙)である。そして、吳語(蘇州、温州)にのみ“家生”が分布している。

### 家事 jiāshì

積義：「家の財産」。現代共通語では一般に“家産”。

《現漢》に一般語語彙で積義“家庭的事情”、方言語彙で積義“家境”(暮らし向き)、《古今》は一般語語彙で積義“家务”(家事)、《汉语》も一般語語彙で積義“①家中之私事。②傢伙(=生活用具)”とするが、いずれも積義“家産”(家財、家の財産)とは少々異なる。《拼音词汇》に“家事”を収めるが、積義は不明。

“家事”について、方言辞典類では《汉方常》に積義“家産”とし、《二刻拍案惊奇》より挙例。《吳》にも収録。

《汉方大》の“家事”は「“家私”積義“①家具”」を見よとする。“家私”項の方言区域は南方であるが、以下の如く相当広い。即ち、湘語(湖南省長沙、双峰)、客家話(江西省上猶社溪。広東省陽江)閩語(福建省福州、福安、建瓯、廈門。広東省潮州、汕頭、海康。海南省瓊山。台湾省)である。また、“家私”は“家俬”、“家事”とも作るとする。しかし、これらは積義“家具”であり、積義“家産”は《汉方大》に無いので該当しない。

近世語辞典類では《例释》、《方言俗语》に積義“家私；产业”(私財；家財)で収録。現代語では吳方言に残存しているが、近世語では北方語系資料にも見える(例えば、《方言俗语》は《金瓶梅》、《醒》、《石点头》の如く、北方語系資料のみ挙例)。《古方言》に積義“家业”(家の財産)とする。《百部小说》に“家事”を“家私”と同義で積義“家産”とする。

《醒》の例。先ずは積義“家産”(家の財産)の例。

如今你奶奶還是有兒有女,要守得家裏。這產業脫不過是我們得。(20.9b.5)

(今お前の奥様はやはり子供があるっていうのかい？それで、家の財産を守れるの？この財産はどのみち俺達のものだけ)

次は、積義“家境”(暮らし向き)であるが、これも「家の財産」を含んで指していると言えなくもない。その例。

媒婆來往提説，這魏才因侯小槐為人資本，家事也好，主意定了許他。(41.9b.4)

(口入れ屋の女が来て、この魏才は人品が誠実で、暮らし向きも良いので彼に嫁ぐのを決めるのが良いと申しました)

寄姐还不曾許聘與人；家事只可過日；見在翰林院門口西去第五六家路南居住，…。(75.3b.4)

(寄姐はまだ嫁ぐのを承諾していない。その日暮らしの毎日で、今は翰林院の入り口西を五六軒先の道の南側に住んでいる)

### 家堂 jiātáng

積義「一族の祖先の霊を祀る廟」。現代共通語では一般に“供祖宗牌位处”。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に積義を“旧時供祖先牌位的小閣”(旧時、先祖を祀る位牌を安置させる廟)とし、呉方言で収録。《吳》にも同じ積義で収録。北方語系辞典類《山东》、《北京话》、《現代北京》に未収。

《漢方大》に積義“供奉祖宗牌位的地方”、方言点を呉語(上海市、松江。江蘇省蘇州、江陰。浙江省紹興、鎮海、象山)、西南官話(雲南省玉溪、澄江)とする。

近世語辞典類では《古方言》に“今吳方言称供祖宗牌位的小閣为‘家堂’，《越谚》：‘家堂，供祖先牌位处’。有的注家据此释‘家堂香火’为‘祖宗’，恐不亦无以偏概全之嫌”とある。《百部小说》に積義“家祠”(一族の祖先を祀る廟)とする。《例释》、《方言俗语》に未収。

《醒》の例。

若是有晁源的時候，他還放僻邪侈，作孽非為。有了這等主人，自然就有這等的一般輔佐。既是有了如此的主僕，自然家堂香火都換了凶神，變成乘氣，生出異事。(30.4b.1) (“乘” = “乖”)

(晁源がいる時は、彼女はなおも勝手な振る舞いをし、どんな悪事でも平気でやり、非道の限りを尽くした。そんな主人を得れば自ずとそういう同類の補佐ができる。その様な主従二人がいれば当然ながら先祖を祀る廟の線香も凶神に変わり、異常な気になり、やがて異変が生じる)

過了一向，兩個又走到狄家。那时狄家還該興旺的時節，家宅六神都是保護的，有這樣怪物進門，自然驚動家堂，轟傳土地，使出狄員外不因不由，復又撞了個滿面。(68.3b.7)

(暫くして二人は再び狄家へ来た。その時、狄家はまだ運氣が隆盛だったので、家宅六神は全て守護しており、かくの如き変な輩が家へ入ってきた場合、自ずと先祖を祀る廟を揺り動かし、土地神に盛んに伝え、狄員外を使って知らず知らずの内に再三真っ向からぶつからせた)

## 家下 jiāxià

積義：「妻」。現代共通語では一般に“妻子”。“家下”は非軽声語。

《現漢》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにも“妻子”の意味では未収。《古今》、《汉语》、《補》、《百部小説》、《近漢》等に別義“家里”〈家の中〉とする。《補》は更に“多见于早期白話”とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》に非軽声語で山東方言とし、《庄农日用杂字》より挙例。《山东》、《北京話》、《吳》に未収。(一方、軽声語[jiāxià]は積義“家里”〈家の中〉とする)。

《漢方大》に積義“妻子”で方言点を冀魯官話(山東省)、中原官話(江蘇省徐州)、粵語(広東省陽江)とする。

《漢方詞》の詞目“妻子”項で“家下”を指す方言点は粵語の陽江のみである。これは《漢方常》の主張する「山東方言」と大きく相違する。

近世語辞典類では《例釋》に非軽声語で山東方言とする。《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。

劉振白道：“二位請到舍下，根菜壺酒，敬一敬兒。…”。(中略)劉振白道：“(中略)老韓又是個原告苦主。說不的，狄大爺，你叫家下快着備飯，管待二位爺，僭再商議。(後略)”(80.15a.2)

(劉振白は「どうぞお二方は拙宅へお出下さい。粗酒粗菜ですが、一献差し上げましょう。…」と言った。(中略)劉振白は「(中略)韓さんは原告の家族の方です。いやも応もないですよ。狄旦那さん、あんたは奥さんに早く料理の準備をさせてこの二人の旦那方をもてなしてください。相談はそれからですよ。(後略)」と言った)

なお、《醒》のその他の“家下”の例は“家里”(家の中の人)と積義するのが妥当で、「妻」ではない。

素姐到家，…；見了別人把他的胳膊致得這樣，心中有些疼痛。家下的都料得他猛熊一般，出去打罵了別人，將這一肚皮惡氣必定要出在狄希陳身上。(66.9a.10)

(素姐は家へ着ますと、…。他人が夫の腕をこんなにひどくしたのを見て、胸の内は少々痛みました。家の中の者は彼女が血氣盛んな熊のように出て行って他人を殴り罵り、この腹の中の怒りを必ずや狄希陳の身の上に出すだろうと考えました)

對素姐說道：“你在此住了這將近兩月，拐驛的又尋找不着，天氣又將冬至數九的時候，你家下又沒有人尋到這邊，…。(88.5a.3)

(素姐に対して「あんたはここに二ヵ月近くに住んでいるけれども、ラバを盗んだ奴も見つからず、気候も冬のさなかの寒い時期になり、あんたの家の人もこちらへ捜しに来ないし、…」と言った)